

京極黄門定家卿の山莊あるひは時雨亭と号る旧跡、ところぐくにあり、かの卿の詠歌により、又は少しき因になづみて後人これを作ると見えたり。

続拾遺 　　いつはりのなき世なりせば神無月誰まことより時雨ぞめけん 　　定 　　家

〔此歌を種として謡曲を作したり、時雨亭も是より出たり、実あるにあらず〕小倉の山莊といふは、清凉寺西の門より二尊院までの道、二町ばかりの民家ある所を中院町といふ。〔いにしへは愛宕山の末院あり、今絶て所の名とせり〕此半を北へ入る細道あり、竹林の後のかたに門ありて東に向ふ、これを厭離庵といふ。門の内に柳の水といふ清泉あり、草庵の跡は西の高き所と見えたり。〔西南は高くして石垣をしめたり〕中頃まで愛宕大善院の領にして、庵室などありしが、今は破壊して片ばかりの庵ありて禅僧など住めり。

黄門此山莊にてよめる

新 古 小倉山しぐるゝ頃の朝なくきのふはうすき四方の紅葉葉 　　定 　　家

続 古 露霜の小くらの山に家ゐしてほさでも袖の朽ぬべき哉 　　同

風 雅 忍ばれむ物ともなしに小くら山軒端の松に馴て久しき 　　同

明月記〔此書は黄門あらはし給ふなり、和歌庭訓に曰、去る頃元久住吉参籠の時、汝明月なりと霊夢三夕まで感じ侍りしによりて、家風に備ん為に明月記を草し置侍る事も、身に過分のわざとこそ存候へと云云〕

彼記に曰、文暦乙未年五月廿七日己未朝天晴、自不知書事、嗟峨中院障子色紙形故予可書由彼入道懇切雖極見苦事、染筆送之古來ノ人歌各一首自上天智天皇以來及家隆雅經卿。

〔小倉山百人一首といふは、定家卿の作にして、古今の歌仙百人をえらび、花実相應して秀逸なる和歌を、一人に一首づ、撰出し給ふ。一説には新古今撰集の歌、黄門の心に叶はず、故に此百首を撰すとなん。又一説に唐の滕子京が岳陽樓に詩賦をきざめる事、又道雅三位の八条の別荘に歌合かゝれし事になぞらへ給ひしにや。此百首世々を経て抄物あまたあり。宗祇法師、玄旨法印、貞徳老人、北村季吟、円珠庵契冲など、家々の説多くあり。百人一首に其人の絵姿を書事は後世の作なり。黄門真筆の色紙には作者の名だに多くはなし〕